自然災害の恐ろしさ

清水（しみず）　雅弘（まさひろ）　●日本郵政グループ労働組合（ＪＰ労組）中央執行委員

私が経験した（見た）自然災害で、強く印象に残った３つを古い順に挙げると、1995年１月17日の「神戸・淡路大震災」から始まる。私たち家族４人が深い眠りについていたとき、愛媛の古い社宅が大きく揺れ始め、我々を目覚めさせた。洋服ダンスがガタガタと小刻みに揺れ、幼い子供たちを守ろうと必死にそれを押さえていたのを覚えている。愛媛県では大きな被害はなかったものの、阪神高速道路が倒れ、駅が潰れた光景は忘れることができない。

次に印象的だったのは2011年３月11日の「東日本大震災」である。私は「連合」の災害派遣ボランティアに参加を希望し、４月に仲間たちと一緒に宮城県へ向かった。ボランティア活動を行った家の近くには、津波が残した大きな水たまりがあり、その中には数匹の魚が泳いでいた。また、家があったと思われる場所には所々、赤い布が巻き付けられた細長い棒が刺さっていた。これは、ご遺体が発見された場所の目印だという。大きな漁船が２隻、海からはるかに離れた道沿いに〝停泊〟していた。街があった場所を歩くと、アパートの２階に軽自動車が逆さまに突き刺さっていた。そのような風景は写真で見たことはあったが、直接目の当たりにするのは初めてであった。

石巻での作業を終えてバスに向かう途中、小学校を囲んでいるような巨大なゴミ捨て場を見つけた。そこには校舎に掲げられていたと思われる大きな白い時計が、２時48分を指したまま捨てられていた。

最後に挙げるのは、2018年６月28日から発生した西日本豪雨である。この時、西日本を中心に非常に強く、時には猛烈に、長い時間、雨が降り続いた。故郷の近くには「肱川あらし」で有名な大きな川が流れ、その肱川水系は地域の生活において大きな役割を担っていたものの、過去に何度も氾濫し、治水対策も行われてきた。しかしながら、この時は想定を超える雨が降り続いたため、多くの友人や知人が被災をした。私はすぐに仲間とともにボランティアに参加したが、その惨状は私が目の当たりにした中で、東日本大震災に次ぐものであった。

この時、特別警報が発令されたのだが、避難情報の表現が問題視された。危険が迫っているにも関わらず、国や自治体から発せられる避難情報に対して「避難しようと思わなかった」と感じる人が多く、この災害をきっかけに「避難情報に関するガイドライン」の見直しが行われることとなった。災害時の正常性バイアスは、私たちの行動に大きな影響を及ぼすと考えられている。難しい課題かもしれないが、最悪を想定しながら冷静に状況を判断し、適切に対処することが重要だと考える。

そうは言っても、先日５月11日の早朝、突然の緊急地震速報に驚いた。電話と同様に突然鳴るものではあるが、私のような小心者には心臓に悪い。

これから台風シーズンに突入する。「備えあれば憂いなし」だ。防災リュックの中身をチェックしようと思う。